

お金のやりとりから見た子どもの親子関係と友達関係

大阪調査から

東京理科大学	竹尾和子
中国政法大学	片成男
大阪教育大学	高橋登
立命館大学	サトウタツヤ
共愛学園前橋国際大学	山本登志哉
共愛学園前橋国際大学	呉宣児
大真大学	金順子
国民大学	崔順子

How Children Build Up Parent-Child and Peer Relationships through the Use of Pocket Money: Results from a Survey of Children Living in Osaka

Tokyo University of Science	TAKEO, Kazuko
China University of Political Science and Law	PIAN, Chengnan
Osaka Kyoiku University	TAKAHASHI, Noboru
Ritsumeikan University	SATO, Tatsuya
Maebashi Kyoai Gakuen College	YAMAMOTO, Toshiya
Maebashi Kyoai Gakuen College	OH, Seonah
Daejin University	KIM, Soon Ja
Kookmin University	CHOI, Soon Ja

大阪の小学生，中学生，高校生に実施したお小遣いに関する質問紙調査の一部として、親子間でのお金のやりとり、友達とお金のやりとりに関する子ども自身の認識について調べた。親子間のやり取りに関する項目群・友だち間のやりとりに関する項目群それぞれにおいて項目間の相関係数を求め因子分析を行った結果、各尺度において2因子が抽出され、親子関係尺度の2因子を「親の権限」「親への融通」と命名し、友だち関係尺度の2因子を「自己責任」と「相互扶助」と命名した。尚、「親の権限」は親が子どものお金を自由に使えるという認識を指し、「親への融通」は親のために子どもが支出しても構わないという認識を指す。また、「自己責任」はお小遣いを使うときは個々人が独立して行うことを意味し、「相互扶助」は友だち同士で互いに融通しあいながら共同でお金を使うことを意味する。更に、各因子得点の学校段階差を検討した結果、親子間のやりとりでは中学生において「親への融通」が有意に低く、「親の権限」は低い傾向が見られ、友だち関係では「自己責任」は学校段階の上昇とともに得点が低くなり、「相互扶助」は中学でいったん得点が下がり、高校で上昇し

た。この結果から、子どもが親から独立をし友だちとの関係の中で自立的にお小遣いを使う発達の变化を浮き彫りにした。

【キー・ワード】お小遣い，親子関係，友達関係

A group of Japanese children (N = 622) aged 10, 13, and 16 completed a questionnaire about parent-child and peer relationships in terms of how they use their pocket money. As a result of the factor analysis of parent-child relationship items, two factors, called "authority of parents" and "advance to parents" were discovered. "Authority of parents" means that the parents use the children's money freely, and "advance to parents" means that the children would not mind spending their money for their parents. As a result of the factor analysis of the peer relationship items, two factors, called "self-responsibility" and "mutual benefit" were discovered. "Self-responsibility" means that each child uses their money individually, and "mutual benefit" means that children use their money collectively. Thirteen-year-olds were lower in the "advance to parents" and in the "authority of parents" score than the other two groups. "Self-responsibility", which corresponds simply to the social beliefs concerning pocket money in Japan, decreases with age, while "mutual benefit", which is against that belief, increases from the 13-year-old group to the 16-year-old group. This result indicates a developmental process in which children become independent from their parents and start using their own money independently while socializing with their friends.

【Key Words】Pocket money, Parent-child relationship, Peer relationship

問 題

お金は人間の社会経済的活動において中心的役割を成すと同時に、子どもの生活世界においても重要な構成要素である。子どもがどのようにお金を手にし、それをどのように使い、それをめぐって他者とどのようなやりとりをするかは、その社会経済的機能の概念的理解に留まらず、子どもが社会とどのようにつながり、他者とのどのようにかかわっているかと深く関連する。また、世界経済のグローバル化の中で、お金はそれぞれの文化を生きる子どもたちを比較し、また対人関係の特徴を理解するための有効な手がかりになりつつある。

片(2002)による援助活動に関する研究では、「お金のやりとり」という行為が、援助に関する物語作りに引用される頻度が、日本に比べて中国では有意に高いことが示された。また、これまでの日中韓の子ども達を対象としたインタビュー調査(山本・片, 1999; 2001; 山本他, 2002a; 山本他, 2002b; 山本他, 2003 他)では「おごり・おごられる」の意味づけや評価が、国によって著しく異なることが示された。これらの結果はお金のやりとりにおいて文化的多様性が存在することを示している。これを踏まえ、我々は子どものお金の使い方について、比較文化的視点を取り入れながら、日本、中国、韓国、ベトナムをフィールドに調査・研究を行っている。そこではお小遣いインタビュー・

買い物場面の観察・質問紙の三種類の方法を用い、質的/量的、認知的/行動的など、現象の多面的な検討を試みている。本論文では、日本の大阪市内の子どもを対象に実施した質問紙調査の結果について報告する。

我々が行った質問紙調査は、お小遣いのもらい方、もらう名目、もらう目的や額、お金のやりとりに見られる友だち関係、お金のやりとりに見られる親子関係、今一番買いたいもの、お金で買えないもの、用途毎の支出経験の有無と出資者、お小遣いの使い方に関するよし悪しの判断、用途毎の自由な支出への許容度の理解から構成されている。本論文ではそのうちのお金のやりとりに見られる友だち関係、お金のやりとりに見られる親子関係について報告する。

子どもに与えられたお金は子どもの自由になるのか、そこに親の介入はどのくらいあるのか、子どもは自分のためだけにお小遣いを使うのか、あるいは親のために使うのか、それとも友だちのために使うのか。これらの現象は文化により多様である。具体的に言うならば、子ども一人一人を取り囲む対人関係のあり方やその基底をなす文化的価値観や規範によって多様である。つまり、子どものお小遣いの使い方を理解するためには、子どもを取り囲む対人関係やその文化規範にも目配りをし、それとの連続性の中でお小遣いの使い方を捉えることが有効であると考えられる。このような認識に基づき、我々はお金使用をめぐる親子関係と友だち関係を明らかにするための尺度を開発した。開発においては、これまでの日中韓の子ども達を対象としたインタビュー調査(山本,1992;山本・片,1999;2000;2001;山本他,2002a;山本他,2002b;山本他,2003)に基づき、主に次のような視点を取り入れている。

親子関係尺度作成の視点:相互性の視点 お小遣いは親から子どもへと与えられる。親が稼いだお金によって子どもは生活をする。この考え方は親がお金をめぐる親子関係において主導的な地位を占めることを意味し、少なくとも日本社会ではきわめて一般的である。しかし、一見私たちには自明に見える「親から子供へ」というお金の流れであるが、理論的にはその逆、すなわち「子どもから親へ」というお金の流れも想定する必要がある(この問題は一般化すると浜田(1999)の言う“能動と受動の相補性”の問題にも包摂される可能性がある)。

「子どもから親へ」というお金の移動は日常的な現象にも見られ、例えば、子どもが幼少期にもらうお年玉はすぐさま親に預けられ、子どもが成長するまで親が管理するという光景はしばしば目にすることである。出産祝いは子どもの誕生を契機になされるものであるが、それはほとんど親のためになされるものである。これらの現象は、お金は必ずしも親から子どもへと流れるのではなく、子どもを経由して、子どもから親へと逆流することもありうることを示す。更に、日中間の比較研究を行った片・山本(2001)によれば、日本では子どもが親からもらったお小遣いを自分のために使うことが一般的だが、中国の朝鮮族においては、子どもが自分のお小遣いで「学校の納付金を払う」とか「市場に買い物に行って食材を買う」など、子どもが親のためにお金を払う現象が見られた。これらのことはお金をめぐる親子関係を理解するにあたり、「親から子どもへ」という視点のみならず、「子どもから親へ」という視点が必要であることを示唆する。以上を踏まえ、「親から子どもへ」「子どもから親へ」という相補的なやりとりという観点から、お金のやりとりにおける親子関係を捉えるための尺度を開発することを試みた。

友だち関係尺度作成の視点：平等と両義性の視点 親子関係と違って、お互いの力関係が相対的に対等である友だち関係においては、お金をめぐるやりとりに平等の原則が重要視される。冒頭で述べたように、友だち同士の「おごり」や「お金の貸し借り」といったお金のやりとりの捉え方は、日本、中国、韓国では顕著に異なることが明らかにされた（片，2002；山本，1992；山本・片，2001；山本他，2002a；山本他，2002b；山本他，2003）。友だち関係における平等の原則と、お金のやり取りに関する日中韓間の文化差について、山本・片（2001）は日本ではおごりに対して強い抵抗感が示されることが多く、これは、おごりによって友だち関係の平等性が損なわれるという認識が大きな力を持っている可能性があるとしている。一方で、山本・片（2001）や山本他（2002a;2002b;2003）によれば、中国のととりわけ漢民族や朝鮮族、韓国では、おごるという行動が一般的で、むしろ望ましいこととされており、更に、おごったらおごり返すという原則が一般的になっている。このおごったらおごり返すという原則もまた、友だち関係における平等性を維持するための原則と言えるだろう。このように、おごりはお小遣いをめぐる友だち関係の構造の差を考えるための重要なポイントになるかもしれない（山本・片，2000）。また、「お金の貸し借り」も、日本では否定的評価がなされる傾向があるが、韓国や中国では許容されたり、あるいは、望ましいとされることが多く、その背景にも、「おごり・おごられ」と同様の友だち関係における平等性の維持が組み込まれているのではないだろうか。このようなことから、本研究の友だち関係尺度では、友だち同士の「おごり」や「お金の貸し借り」といった具体的な現象を扱う。そこから、これらの具体的現象に組み込まれている友だち関係の仕組みについて明らかにしたいと考えている。

「おごり」や「お金の貸し借り」に見る友だち関係について、平等の原則から検討する可能性を述べたが、もう一つ、両義性という観点から検討することができるのではないかと考えている。これまでのいくつかの先行研究（山本・片，2001；山本他，2002a；山本他，2002b；山本他，2003）から推測される所では、友だち同士のお金をやりとりには、借りる側か貸す側か、おごる側かおごられる側かといった、立場の違いによってその意味が異なることが考えられる。例えば、お金を借りたり、おごってもらったりする側にとっては、お金のやりとりは迷惑をかけることといった意味を持ち、貸す側やおごる側にとっては相手を助けてあげるという意味を持つ可能性がある。このような両義性の綱引き関係の中で、お金のやりとりが展開されることが考えられる。更に、この「おごる側 - おごられる側」、あるいは「貸す側 - 貸される側」の異なる意識の綱引き関係の様相には文化的多様性があることが予想される。例えば、これまでのいくつかの先行研究（山本・片，2001；山本他，2002a；山本他，2002b；山本他，2003）から推測すれば、日本では「迷惑をかける」という意識が強く、その結果として、「おごり」や「お金の貸し借り」が抑制される傾向が高いことが考えられる。対して、中国や韓国では、「助けてあげる」という意識が、貸す側、おごる側だけでなく、借りる側、おごられる側にも共有され、「おごり」や「お金の貸し借り」が促進される傾向が高くなる可能性がある。このような「迷惑をかける」「助けてあげる」という「おごり」や「お金の貸し借り」に内包される両義性の有無については推測の域を脱しえず、現時点では断定できない。しかし、特定の文化における友だち関係を微細に捉える時、更には、その文化的多様性を捉える時に、有効な視点と考えられるため、本尺度もその視点からの尺度項目の設定を行い、検討していくこととした。

我々は、以上の関心に基づき作成した調査を大阪の小学生、中学生、高校生に実施し、お小遣いを巡る友だち関係と親子関係の特質とその発達のな変化を検討した。その結果について以下に報告する。

方 法

調査対象者 大阪府下の公立小学5年生150名(男子77名,女子72名,不明1名),大阪府下の公立中学2年生260名(男子122人,女子125人,不明13人),大阪市内の公立高校2年生212名(男子66名,女子108名,不明38名)。調査対象となった小学校はその学区を新興のマンション・団地群と住宅地群とし、そこからの子どもたちが通っている。中学校は、地域的に、昔から開けている旧市街地に都市近郊の農業も行われているところも含まれ、高校は大阪市内の公立総合制高校であり、市内全域から生徒が通っている。

調査方法 質問紙調査を実施した。調査は授業内に集団式で行い、無記名式で回収した。

質問紙 調査に実施した質問紙は、二つのタイプにわかれ(質問紙1と質問紙2)、質問紙1、2に共通する質問内容は、お小遣いのもらい方、もらう名目、もらう目的や額、お金のやりとりに見られる友だち関係尺度、お金のやりとりに見られる親子関係尺度、今一番買いたいもの、お金で買えないものであった。質問紙1では、～に加え、用途毎の支出経験の有無と出資者が加えられた。質問紙2は、同じく～に加え、お小遣いの使い方に関する良し悪しの判断、用途毎の自由な支出への許容度理解が加えられた。これらの質問事項は中国朝鮮族を対象とした調査(山本・片,1999;2001)で作成され用いられた質問紙を元に、韓国済州道及びソウル市におけるインタビューや観察調査(山本・片,2001;片・山本,2001;山本他,2002a;2002b;2003)を踏まえ、日中韓の研究チームで討議をして作成したものである。本研究で扱う友だち関係尺と親子関係尺度は質問紙1、2のいずれの一部として調査事項に含まれている。

調査時期 2002年11月。

結 果

分析1 友だち関係尺度

項目レベルの反応 項目に対する反応について 友だち関係尺度の個々の項目に対して、対象者がいかなる反応をしているかを分析した(Figure1)。Figure1は友だちとのお金のやりとりに関する各項目への肯定度合いを「全く反対」1点～「非常に賛成」5点として得点化して学校段階別に平均肯定度を求め、小学生で肯定度の高い順に配列したものである。肯定度が4を越すのは「友だちから借りたお金は、たとえ、小額でもきちんと返さなければいけない(返済確実に)」(学校段階差 n.s.[学校段階差の有意性については、小学生、中学生、高校生の学校段階の別を独立変数とし、各尺度項目の得点の従属変数とする一要因の分散分析により検討した。学校段階差については以下同様。])、「友だちからお金を借りることは、たとえ、小額でも相手に迷惑)をかけることになる(借金相手に迷惑)」(学校段階差 n.s.)で、「友だちの間でお金の貸し借りをするのはよくない(金銭貸し借りだめ)」

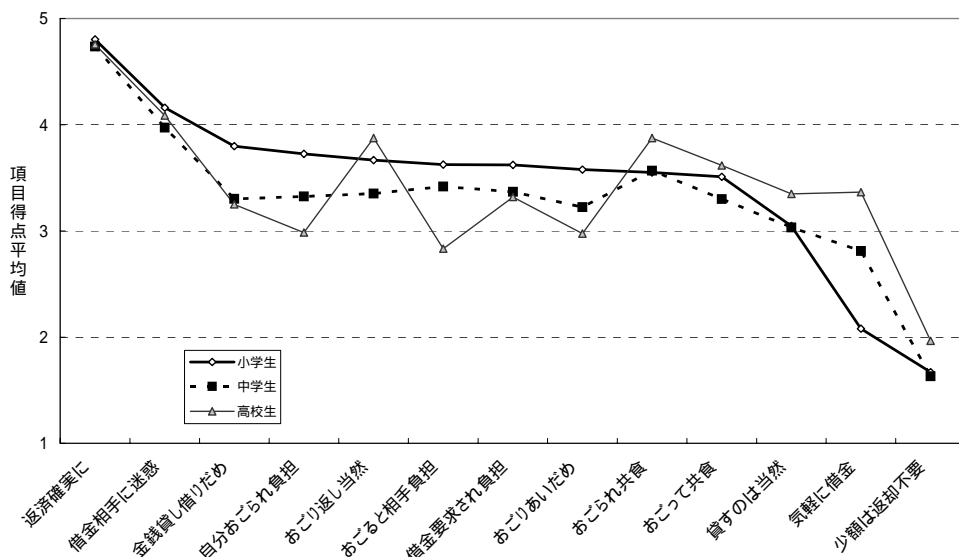


Figure 1 友だち関係尺度:各項目の平均値(学校段階別)

($p < .01$), 「私は友だちからおごってもらいと負担に思う(自分おごられ負担)」($p < .01$), 「友だちからおごってもらったら,次に私がおごるのがあたりまえである(おごり返し当然)」($p < .01$), 「私が友だちにおごと,その友だちは負担に思うだろう(おごとと相手負担)」($p < .01$), 「私は,友だちからお金を貸して欲しいといわれると負担を感じる(借金要求され負担)」($p < .05$), 「友だちの間でおごったりおごられたりするのはいくはない(おごりあいだめ)」($p < .01$), 「もし友だちが私にお菓子などを買ってくれれば,私は遠慮するより一緒に楽しく食べることにする(おごられ共食)」($p < .05$), 「友だちにお菓子などを買ってあげるのは,一人で食べるより楽しい(おごって共食)」($p < .05$)がこの順に続き,さらに「友だちがお金で困っているなら,私は迷わず貸してあげることができる(貸すのは当然)」($p < .05$), 「私は友だちと一緒に買い物に行き,お金が足りなくなったとき,友だちから気軽にお金を借りることが出来る(気軽に借金)」($p < .01$), 「友だちが私から借りたお金が小額なら,友だちはそれを私に返さなくてもいいと思う(小額は返却不要)」($p < .01$)が3以下で肯定度が急に低くなる。全体の傾向を見ると小学生の場合は,上述の から にあるような[友だち同士でお金を融通しあう関係]の項目に肯定の度合いが相対的に低く, を除く から にあるような[お金が必要な事態には個々人で対処する]ことを肯定する傾向が伺われる。中学生は中位の項目でやや肯定度が減少するが,全体に小学生と同様の傾向を示す。これに対して高校生では中位の項目の多くで中学生よりさらに減少幅が大きくなり,[個々人で対処する]ことに中性的な態度(3前後)になるが,逆に低位の項目では肯定度が高まり,中位の多くの項目と逆転して[友だち同士でお金を融通しあう関係]により肯定的な姿勢が生じるなど,全体のパターンに質的な違いが生じる。学校段階差を検定すると,上記 の項目では高校生が小学生 and/or 中学生を有意に上回り,明らかに順序の低い方の項目で肯定度が増大していくことが確認される。全体としては小学生に見ら

れるパターンは中学生では多少数値が変化しつつも基本的に維持され、高校生になって崩れるという展開を見せる。ここで[友だち同士で融通しあう関係]に否定的な小学生のパターンは、日本の多くの親の持つお小遣いを巡る教育観と一致すると考えられ、したがってその後の<発達>はこの親の価値観からの逸脱として展開するとも言えるだろう。

性差はあまり見られなかったが、
といういずれも[お金を融通しあう関係]へ否定的なものについて、女>男の有意差が見られた($p < .01$)。

因子ごとの分析 上記の結果の背景となる要因を検討するために、友だち関係尺度の13項目について因子分析を行った。13項目の回答に対し、「1. 全く反対」を1点、「5. 全く賛成」を5点として得点化した後、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、スクリープロットと解釈可能性から2因子解を採用した。このとき因子負荷量の低かった5項目を除き再分析して得られたバリマックス回転後の因子分析結果をTable 1に示す。因子負荷量の高い項目の内容から、第1因子は「自己責任」、第2因子は「相互扶助」と命名した。各因子の因子寄与率は、それぞれ26.28%、13.69%であった。「自己責任」はお小遣いを使うときは個人が独立して行うことを示す因子、「相互援助」は友だち同士で互いに融通しながら共同でお金を使うことを示す因子と考えられる。

因子得点の発達差 第1因子の因子負荷量の高い項目は「友だちの間でおごったりおごられたりするのはいくはない。」「友だちの間でお金の貸し借りをするのはよくない。」「私は友だちからおごってもらおうと負担に思う。」「私は友だちと一緒に買い物に行き、お金が足りなくなったとき、友だちから気軽にお金を借りることが出来る。」「友だちからお金を借りることは、たとえ、小額でも相手に迷惑をかけることになる。」であった(うち、は負の因子負荷量)。「自己責任」の負荷量の高い項目はいずれも、高校生が小学生 and/or 中学生よりも得点の低い項目が主である。他方、第2因子の因子負荷量の高い項目は、「友だちからおごってもらったら、次に私がおごるのがあ

Table1 友だち関係尺度 因子分析結果(主因子法 バリマックス回転)

項目	自己責任	相互扶助
友だちの間でおごったりおごられたりするのはいくはない。	0.77	-0.25
友だちの間でお金の貸し借りをするのはよくない。	0.76	-0.18
私は友達からおごってもらおうと負担に思う。	0.60	0.11
私は友達と一緒に買い物に行き、お金が足りなくなったとき、友だちから気軽にお金を借りることが出来る。	-0.56	0.15
友だちからお金を借りることは、たとえ、小額でも相手に迷惑をかけることになる。	0.44	0.03
友だちからおごってもらったら、次に私がおごるのがあたりまえである。	0.10	0.63
友だちにお菓子などを買ってあげるのは、一人で食べるより楽しい。	-0.08	0.56
友だちがお金で困っているなら、私は迷わず貸してあげることができる。	-0.19	0.50

Table2 友だち関係尺度 因子得点の差の検定

	平均値 (標準偏差)	分散分析結果	多重比較結果
小学生	0.38 (0.93)		
自己責任 中学生	-0.05 (0.91)	F(2,584)=19.20, p<.01	小>中、高 p<.05
高校生	-0.20 (0.78)		
小学生	-0.01 (0.88)		
相互扶助 中学生	-0.15 (0.82)	F(2,584)=9.74, p<.01	高>中 p<.05
高校生	0.18 (0.63)		

りまえである。」「友だちにお菓子などを買ってあげるのは、一人で食べるより楽しい。」「友だちがお金で困っているなら、私は迷わず貸してあげることができる。」であった。これらはいずれも高校生が小学生 and/or 中学生よりも得点の高い項目が主である。よって、「項目ごとの分析結果」で見られた学校段階差の背景にこの2因子が関与していることが考えられる。その点について、詳しく検討するために各因子得点についてその学校段階差を検討した。

各学年の平均、分散分析の結果、および Tukey 法による多重比較の結果を Table 2 に示す。Table 2 から、いずれの因子得点についても学年差が見られることが分かる。ただし、その傾向は因子によって異なり、「自己責任」因子では学年の上昇とともに点数が低くなる傾向があり、「相互扶助」因子では中学でいったん点数が下がり、高校で上昇していた。

「自己責任」の因子得点が高いのは、質問項目をまとめると「友だちとの間でおごったりおごられたり、金の貸し借りをすることはよくないことであり、またそうすることは互いに負担に感じる」ということである。本調査の結果は、学年の上昇とともにこうした規範に対しては許容度が高まることを示している。一般に日本では親も教師も含め、金銭を友人との間で融通し合うことに対して強い忌避感情があるが、小学生の場合はこうした大人の規範意識がそのまま反映されている面があると思われる。「自己責任」が学年の上昇に伴って減少することは、大人の規範の無条件の受容から脱し、自分たちの現実の経験の中で判断が行われるようになること、また、とりわけ高校生の場合はアルバイトを行うことで「自分の」金を持ち、用途についても自立性が高まることなどが理由として考えられよう。

一方「相互扶助」因子の結果はもう少し複雑である。この因子は、「友だちとのつき合いは大事であり、そこに金を媒介させることは当然である」とまとめられることができるだろう。因子得点は中学生で低く、高校生で高くなっている。高校生の場合は「自己責任」因子と同様、金の用途についての許容度が高まり、また独自の規範意識を持つようになった結果であると考えられるが、中学生で下がる理由は必ずしもはっきりしない。思春期前期の友だち関係の質的な変化と、金に関する考え方の変化が組み合わさってこのような結果になった可能性があるが、この点については他の指標との組み合わせの中でさらに検討する必要があるだろう。

分析 2 親子関係尺度

項目レベルの反応 次に親子関係尺度に関する分析結果を報告する。親子関係尺度の各項目に対する小・中・高生の肯定度を、小学生の値を基準として高いものから順に並べたのが Figure 2 である。もっとも肯定度が高かったのは「親が私におこづかいをくれることを約束したら、どんなことがあ

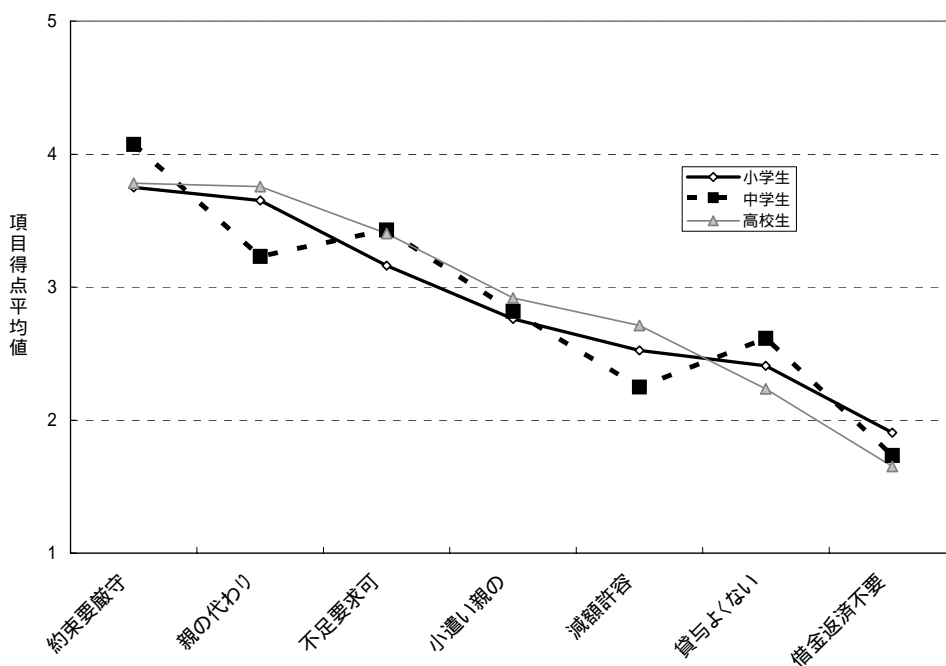


Figure 2 親子関係尺度: 各項目の平均値 (学校段階別)

ってもその約束は守るべきである(約束要厳守)」であり、以下「親の代わりに、私が自分のおこづかいで細かいお金などを払うのはいいことである(親の代わり)」「何かほしい物を買う時、自分のおこづかいで足りないとは私は親に足りない分を要求することができる(不足要求可)」「おこづかいをくれたのは親なので、おこづかいは私のお金ではなく親のお金である(小遣い親の)」「もし私に臨時にたくさんのお金ができたら、その月のおこづかいを減らされてもいい(減額許容)」「親が細かいお金がないからといって私からお金を借りるのはよくない(貸与よくない)」「親は私から借りたお金を返さなくてもいい(借金返済不要)」と続く。

全体の傾向として言えることは、「お小遣いについて親は厳格に約束を守らなければならない(ただし、逆に自分が定額以上に借りることには比較的許容的)」し、「必要があれば、親の代わりにお金を払ったり、貸したりすることはよいこと」だが、「親といえども自分から借りた金はちゃんと返さなければならない」という子どもの意識が見えることであり、この点については学校段階によらず大きな差異は認められない。

そのような比較的安定した傾向の中で、学校段階での差が認められるものもある(すべて $p < 0.01$)。目立つのは中学生で、「約束要厳守」と「貸与よくない」について肯定的な回答が相対的に多く、逆に「親の代わり」と「減額許容」について否定的な態度が多い。すなわち、親は決められたお小遣いの額は事情の如何に関わらず払うべきであり、逆に子どものお金を何らかの形で親が使うことについては否定的に見る傾向が他の小学生や高校生より強いということがわかる。

小学生と高校生の間で有意差が見られたのは、「減額許容」で高校生の許容度が相対的に高く、

「貸与良くない」で小学生が高いという二つの項目にとどまり、友達関係尺度と異なり、親子関係尺度においては両者の間にあまり差がないのが興味深い。その限られた項目に着いてみると、内容的には高校生の方がお金について、親にも融通する「ゆとり」を感じさせる傾向が多少強まっていることがわかる。

これらの学校段階の変化を見て分かることは、友だち関係尺度に現れた傾向と比べれば、この親子関係尺度の傾向は比較的安定しており、その安定した傾向の中で中学生に多少「防衛的」とも言えるような揺れが見いだされているということである。すなわち、中学生では小遣いに厳密なルールを求める傾向が認められるが、高校生では「ゆとり」がやや目立ってくるのである。

なお、男女差が見られたのは「不足要求可(女>男)」の一項目にとどまり($p<.05$)、女子の方がやや親子間の融通が利く方向で回答されていた程度である。

因子分析結果 上記の結果の背景となる要因を検討するために、親子関係尺度の7項目について因子分析を行った。作成された7項目の質問の回答に対し、「1. 全く反対」を1点、「5. 全く賛成」を5点として得点化した後、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、スクリープロットと解釈可能性から2因子解を採用した。このとき因子負荷量の低かった2項目を除き再分析して得られたバリマックス回転後の因子分析結果を Table3 に示す。因子負荷量の高い項目の内容から、第1因子は「親の権限」、第2因子は「親への融通」と命名した。各因子の因子寄与率は、それぞれ 16.00%、11.99%であった。「親の権限」は親が子どものお金の自由に使えるという認識を示す因子、「親への融通」は親のために子どもが支出しても構わないという認識を示す因子と考えられる。

Table3 親子関係尺度 因子分析結果(主因子法 バリマックス回転)

項目	親の権限	親への融通
もし私に臨時にたくさんのお金ができたら、その月のおこづかいを減らされてもいい。	0.62	0.13
おこづかいをくれたのは親なので、おこづかいは私のお金ではなく親のお金である。	0.44	0.01
親は私から借りたお金を返さなくてもいい。	0.43	0.09
親の代わりに、私が自分のおこづかいで細かいお金などを払うのはいいことである。	0.21	0.60
親が細かいお金がないからといって私からお金を借りるのはよくない。	0.00	-0.46

因子得点の発達差 各因子得点を小学校、中学校、高校間で比較した。各学年の平均、分散分析の結果、および Tukey 法による多重比較の結果を Table 4 に示す。Table4 から、中学生において「親の権限」が低いという傾向が見られ、「親への融通」が有意に低いということが分かる。

中学生の傾向が全体の展開の中でやや特殊な動きをしていることは、友だち関係尺度の項目分析の結果にも現れていたが、ここで見えてくることは、「与えられた私の領分としてのお小遣いを、親は侵してはならない」という防衛的な印象を与える固い意識が相対的に強いことである。

このような中学生の特殊性の背景としてどのようなことが考えられか。子どもを取り巻く物質世界

Table4 親子関係尺度 因子得点の差の検定

		平均値(標準偏差)	分散分析結果	多重比較結果
親の権限	小学生	0.05 (0.79)	F(2,593)=3.04,p<05	
	中学生	-0.09 (0.71)		
	高校生	0.07 (0.68)		
親への融通	小学生	0.06 (0.71)	F(2,593)=12.43,p<01	小、高>中 p<.05
	中学生	-0.16 (0.68)		
	高校生	0.15 (0.61)		

が小学生から中学生への移行に伴い大きく拡大する。そしてこのことは、中学生の購買意欲を促進することにつながるはずである。しかし、それにもかかわらず中学生は高校生とは異なり、アルバイトなどで自分の自由になるお金が極めて制限されており、依然として、親に頼りながら物を買わざるをえない状況にあることが我々の質問紙調査でも確認されている(竹尾・サトウ,2003)。つまり、中学生は購買欲求が高まるにもかかわらず、それを自分の力で満たすことができるような経済力を持っていないという、いわば、ジレンマの状態にあることが考えられる。このことが、中学生において、「親の権限」「親への融通」が共に低まるという、「与えられた私の領分としてのお小遣いを、親は侵してはならない」という意識を高めることへとつながっているのかもしれない。

他方、高校生においては、購買欲求は中学生と同様高いことが予測されるが、先述したようにアルバイトによって自由になるお金を持つことも可能となり、その結果として自分の好きなものを自分で自由に買うといった力を有するようになる。このようなことから、「親の権限」や「親への融通」に対して拒否的になるといった中学生に見られる傾向を必ずしも持つ必要がなくなるのかもしれない。このようなことを考えると、小学生と高校生においては「親の権限」「親への融通」の因子得点の平均値が同程度の値を示しているが、その背景は質的に大きく異なることが予想される。つまり、高校生はお金を使いたいという欲求が高まるが、それを可能にする力を持つようになるという背景を持ち、小学生はそもそもお金を使いたいという欲求を持たないということがその背景になっているのかもしれないのである。

考 察

本研究では親子関係、友だち関係でのお金にやりとりに関する規範意識について、その発達的变化を検討した。これにより主に次の点が見出された。

1. 友だち関係尺度においては因子分析の結果、「自己責任」と「相互扶助」の2因子が抽出された。
2. 友だち関係尺度の2因子の学校段階差について検討した結果、「自己責任」は学校段階の上昇とともに点数が低くなり、「相互扶助」は中学でいったん点数が下がり、高校で上昇していた。
3. 親子関係尺度においては因子分析の結果、「親の権限」と「親への融通」の2因子が抽出された
4. 親子関係尺度の2因子の学校段階差について検討した結果、中学生において「親の権限」が低いという傾向が見られ、「親への融通」が有意に低かった。

山本(1992)がインタビュー調査から示したように、今回の質問紙調査においても、小学生の場合、親子関係尺度、友だち関係尺度いずれにおいても、親の規範意識を無条件に内面化し、親の権威のもとでお小遣いを手にする傾向があることが示された。このことは、彼らにとってのお小遣いが、親の権威と不可分な存在であり、自己の意志の介入の余地のないものであることを示唆する。それが中学生になると、親子関係尺度、友だち関係尺度いずれにおいても、親の規範意識から自立しようとする態度が見られ、とりわけ、親子関係尺度においては「与えられた私の領分としてのお小遣いを、親は侵してはならない」という防衛的な印象を与える意識が相対的に強まることが示された。これはまさに、「親から与えられるお金」「親の監視のもとでのお金使用」といった親の権威と子どもの従属といった位置関係を背景とするお小遣いのやり取りに対する拒否的な態度、および、自己の能動性に基づくお小遣い使用への欲求の萌芽として捉えられよう。そして、高校生の両尺度への反応は、親の価値規範からの自立と友だち関係を軸とした独自の価値観の強化が更に深まることが示された。この現象は高校生になってアルバイトををはじめ、自分の自由になるお金が飛躍的に増えることが背景になっている可能性がある。ここに来て、彼らは「親から与えられるお金」「親の監視のもとでのお金使用」から、「自分で得るお金」「自分の自由になるお金」といった子ども自身の能動性に基づくお金使用を実現することになる。

本研究で明らかにされたお金のやりとりをめぐる親子関係、友だち関係をめぐる学校段階差により、お金というものの理解や使用が子どもの認知発達のような個人内要因のみに帰せられるのではなく、むしろ、各段階の子どもたちが会おう社会的状況とそこに組み込まれている人間関係やお金に対する規範と密接に関係することが確認された。お金が真空中を浮遊する存在としてではなく、人間関係を経路として流れていることを明らかにしたことは、中国のとりわけ漢民族や朝鮮族、韓国など、日本とは異なり、子ども同士の関係で金銭を融通しあうやりとりが当然視される文化を理解する上でも、必要不可欠なステップであったと考えられる。そのことを確認して稿を閉じたい。

引用文献

- 浜田寿美男. (1999). 「私」とはなにか 講談社
- 鯨岡峻. (1998). 両義性の発達心理学 ミネルヴァ書房
- 片成男. (2002). 援助規範逸脱をめぐる相互作用からみる道徳性とその発達 神戸大学博士論文(未公開)
- 片成男・山本登志哉. (2001). 子どものお小遣いと親子関係：親との面接調査から（平成 10 - 12 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(2)(海外)）研究成果報告書「文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達：その日中比較」）, 104 - 116
- 竹尾和子, サトウタツヤ. (2003). お金をめぐる子どもの生活世界：だれがお金を払うか？ 自立と依存 日本社会心理学会第 44 回大会発表論文集, 494-495 .
- 山本登志. (1992). 小学生とお小遣い - お金・物霊・僕のもの 「発達」51, 68 - 76 ミネルヴァ書房

- 山本登志哉, 片成男. (1999). 中国朝鮮族中高生のお小遣い 第 10 回日本発達心理学会大会発表論文集 212
- 山本登志哉, 片成男. (2000). 文化としてのお小遣い - または正しい魔法使いの育て方について 日本家政学会誌 51, 12, 1169-1174
- 山本登志哉, 片成男. (2001). お小遣いを通してみた子どもの生活世界と対人関係構造の民族地域比較研究(平成 10 - 12 年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2)(海外))研究成果報告書「文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達: その日中比較」), 79 - 103
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・呉宣児・金順子. (2002a). 子どもとお金: 韓国済州島で子どもと大人に聞く(自主シンポジウム) 第 44 回日本教育心理学会総会発表論文集 Pp. S74 .
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・呉宣児・金順子・崔順子・片成男. (2002b). 子どもとお金: 子どものお小遣いの使い方 韓国済州島の調査から 第 44 回日本教育心理学会総会発表論文集 Pp29 .
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・片成男・呉宣児・金順子・崔順子. (2003). お金をめぐる子どもの生活世界に関する比較文化的研究: 済州島調査報告, 共愛学園前橋国際大学論集, 3, 13-28

<謝 辞>

調査にあたってご協力いただきました児童, 生徒の皆さん, 仲介の労をお執りいただいた中野剛寛先生, 川崎裕子先生, 河添純子先生, 宮尾義昭先生に厚く御礼申し上げます。また, 本論文執筆にあたり貴重なご助言を賜りました清泉女学院大学の東洋教授に心より感謝申し上げます。

<付 記>

本研究は共愛学園前橋国際大学共同研究費, および, 2003 - 2006 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)(海外))(研究課題名:「お金をめぐる子どもの生活世界の日中韓越比較研究: 儒教文化圏の多様性と文化変容」, 研究代表者: 山本登志哉 共愛学園前橋国際大学)を受けて行われた。

